

## 凡愚の戯言 二〇二五冬

畑中康郎

### ●時事問題

石破茂の人生とは何か

自民党総裁に立候補すること五回。落選を続けていた石破氏は、昨年秋五回目の挑戦でやっと総裁になれた。高市早苗候補と争った末、前首相・岸田文雄氏そして元首相・菅義偉氏の支援を受けて総裁になったのだ。岸田氏は決選投票の際に自民党員を次のように説得した。「もしも高市氏を総裁にすれば中国と親交の厚い公明党が自民から離れてしまう。すると、公明党の選挙協力に頼っている自民党は今後選挙で大変な苦勞を背負いこむ、場合によっては落選の憂き目にあうことになるが、それでいいのか」。これで多くの自民党員は怯んだ。もともと国家の行く末より自己の保身を優先する議員たちは石破氏への投票に傾いた。決選

投票前は一位だった高市氏が僅差で石破氏に敗れた。議員は選挙が怖い。選挙に勝てばいいと思う議員ばかりで、政治の世界で権力を保持したい、ふんぞり返って世間を渡りたい、そういう人間が多すぎる。信念がなさすぎるのだ。加えて二世三世議員たちは、先代からの地盤と看板を守ることに汲々として何ら考えることなく目の前のエサに飛びつく。

石破茂も全く同じで、自分のヴィジョンとか他に譲れない確固たる信念を何ら持ち合わせていない。そんな人間が昨秋の総裁選を勝ち抜いてしまったから始末が悪い。自民党総裁は現状においてそのまま日本国首相に就任することを意味する。しかし彼はこのことの意味をまったく理解していない。首相たる者は単に権力の座に就くだけではもちろんダメだ。会社の社長になるのとはまったく意味が違う。日本に住む一億二千万人以上の国民の生命・財産を守る義務を負うのである。首相になる以上、まず日本をどんな国にしたいのかというヴィジョンがなければならない。そしてそれを達成するための信念や勇氣、胆力、そして知力がなければならない。そうでなければ首相の重責を果た

せない。前述したように石破氏はそうした資質がない。

どうしてそういう人間になったのか。石破氏自身が首相就任前に出版した三〇〇ページを超える大著「保守政治家石破茂」を手掛かりに考えてみる。まさに自分の半生を自分の言葉で語った真実であるからだ。

それによると彼がいかに信念のない他に動かされやすい薄っぺらな人間であったことがよくわかる。彼は元鳥取県知事の石破二郎の息子として生まれた。石破茂にとって過ぎるほど偉大な父親だったらしく、逆らったことがない。逆らうことのできない存在だったのだ。石破二郎氏は建設事務次官から鳥取県知事に当選した人で、官僚としても政治家としても優秀だったことは容易に想像がつく。そういう父親であったからおそらく石破茂氏は議論して勝てると思わなかったに違いない。第一そんな気もない。

学歴から述べよう。高校は慶應義塾高校だ。この学校に入学したとき故郷の鳥取を離れ東京に來た心細さから居心地は良くなかった、と石破氏は告白している。鳥取に帰りたいと言っていた。ところが一学期が終わるころ、すぐに気持ちが変わり望郷の念は雲散霧消した。居心地が良くな

ったのだ。帰りがかったのは一時の気分だった。この人の場合、気分が考えがすぐに変わる。実に単純だ。おそらく仲のいい友人でもできたのだろう。

大学はそのまま慶應義塾に進学。受験勉強で苦労した形跡はない。一般にこの人の人生は楽な方向に簡単に流れる。悩みや葛藤には始めから解放されている人間のような。就職の時だった。鉄道オタクだったことから、当初国鉄を選ぼうとしたらしい。しかし父親に反対された。国鉄がなくなるからだ。民営化が間近のことを父親は知っていた。だから反対した。するといとも簡単に国鉄の就職は放棄した。私に言わせれば、自分の好きなことを親が言ったからという理由で簡単にあきらめるべきではない。自分の一生の問題を簡単に譲るな、と言いたい。次に全日空を選ぼうとした。するとまた父親が反対した。ロッキード事件の影がちらついていたからだ。父親に反対されるとすぐ自分の考えを引っ込める。そこには反対を押し切っても前に進むという意気込みが微塵も感じられない。ふつうは葛藤があり、悩みがあり、それを乗り越える苦しみがあるはずだ。これを自立と言う。ところが石破に限ってすべてあ

つさりと父親の意見に従って、何ら自分で決めることがない。決められないのだ。結局、当時の三井銀行に就職した。その理由がまたいい。三井銀行は東大閥と慶應閥があるからだった。慶應卒の石破氏は頭取を目指す気持ちがあったに違いない。いかにも皮相な考えの持ち主ではないか。そこには会社を発展させよう、あるいは自分も仕事を通じて一緒に成長したいという考えは全くない。三井銀行に入ってしばらくすると、今度は政治家になりたいと言いつ出した。そこで父親に相談するとまたも反対された。おそらく政治家としての資質がないと父親は見抜いていたのだろう。それで銀行員であることに一応は専念する。

ところが父親が比較的若くして亡くなると田中角栄氏が石破茂氏に言った。政治家になるべきだ。田中氏は石破二郎氏にかなりの支援を受けていたようだ。それで恩義に篤い田中氏は、恩返しを考えたのか石破氏を政治家の道に誘ったのだ。何事も他人の言葉に左右されやすい石破氏は、勢いのある田中氏の誘いにいとも簡単に従った。こうして三井銀行を辞めて政治の道を選択するのである。

このように一事が万事である。石破氏は自分の意志で自

分の道を選択したことがないように私には思える。行き当たりばったりの生き方なのだ。あるのは絶対的な保身本能。そして権力志向。そこだけは強固だ。とにかく自分が傷つかないように安全圏に置きたがる。

親の七光りと田中角栄氏の影響で比較的順風満帆の政治家人生を送った石破氏は、いくつかの閣僚を経験した。防衛大臣のときだった。イラク前線にPKO部隊として自衛隊が派遣された。一步間違えれば死の危険さえある。なしろ目の前で戦闘が行われているからだ。最近の日本人がまったく経験していない世界だ。

当時の首相小泉純一郎の命令とはいいながら自衛隊員はよくそんなリスクを抱えながらイラクに行ったものだとは感心する。そうした初めての経験に対し、隊員の士気高揚が是非とも必要となる。そこで前線部隊から士気高揚のためにその時防衛大臣だった石破氏にイラクに視察に来てほしいと要請があった。ところがこの石破氏、三回も出発寸前になってキャンセルした。ドタキャンである。その理由が何とも石破氏らしい。自衛隊トップの自分かもしイラクで死んだら取り返しがつかないことになる。だから自分

はイラクに行けない、と言った。何を言っているのか、私に言わせればいつとき混乱してもそれはすぐに収まる。代わりはいくらでもいるのだ。要するに自分の命が惜しいだけなのだ。

イージス艦あたごと漁船が衝突し二人の漁民が行方不明になる事故が起きた。石破氏が防衛庁長官の時だ。自衛隊が戦争の象徴のようにマスコミから捉えられていた時で、そうした時に起きた事故だから事後の処理はより慎重にしなければならなかったのだが、こともあろうにこの石破氏は事故原因の究明もせずにすぐに漁民宅に謝罪に行った。謝罪とは自衛隊側が悪いと表明することを意味する。そんなこともわからなかったのか。お悔みは当然だが、謝罪はNGだ。結局、事故原因は漁船側にあった。さらに石破氏は自衛隊幹部に原因究明を独自に調査するよう命じている。海難侵犯事故だから管轄は海上保安庁になる。それで問題になった。何を自衛隊は勝手なことをするんだ、との非難を各方面から浴びた。するとどうだ、このとき石破氏は自分が命じたにもかかわらず自衛隊幹部が勝手に動いたと逃げたのだ。これには幹部の人たちも唖然とした。とに

かく石破氏は自分を安全圏に置くことの名人だ。自分では責任を絶対に取らない。そういう人間なのである。自衛隊員の心中はこんな人間にトップでいてほしくない思いでいっぱいだったに違いない。

石破茂という人間のいい加減さ無責任さはこの例に収まり切れない。他にも枚挙にいとまがないがこれ以上挙げても仕方あるまい。一事が万事だ。今回の選挙三連敗の責任も取ろうとしないことに世間が怒っても仕方ない。そういう人間だからこそ、石破氏に自主的に辞任を期待することは無理。したがって自民党会則六条四項の「両院議員総会は自民党国会議員総数の三分の一で開催できる」ことを運用して総会を開き、自民党総裁を改めて選出する機会を作るべきなのだ。そうしないとズルズルと際限なく総理総裁を続けさせることになってしまう。

亡くなった安倍元首相は「石破茂だけは内閣総理大臣にしてはいけない」と繰り返し語っていたそうだ。

(令和七年七月二五日)

## 価値の大逆転にどう立ち向かうか

NHK朝の連続テレビ小説「あんぱん」を楽しみにみている。漫画家・やなせたかしの生涯を描くドラマだ。その中で主人公の一人「朝田のぶ」という女性のとった行動に私は賛同している。

彼女は戦時中、戦地に赴いた兵士たちの無事と戦勝を祈念して先頭に立ってその行動を賛美していた。日本は正しい、日本の戦争は聖戦なのだ。だから戦争に勝たなければならぬ。そしてきつと勝つ、と。子供たちに対してもその考え方を日々の授業で教え込んでいた。

しかし、結果はどうであったか。完膚なきまでの敗戦だった。国土は焦土と化し、国民の財産は失われ、また三〇〇万人を超す死者を出した。子どもをはじめ実に多くの国民が飢えに苦しめられることになった。戦争は結果として明らかに間違っていたのである。（もともとアメリカによって戦争に引きずり込まれたと考える方が妥当とも言える史実がある―ハルノートだ）

戦後、ここで日本を戦争に誘導し国民を塗炭の苦しみに

叩き込んだ、指導者たちに価値の大転換が起こった。すべて正しいと考えて国民を導いていた指導層は完全に間違っていたのである。それは指導層ばかりではない。一般国民の中にも大声で国民を誘導し戦争の渦の中に誘導した人々がいた。実は「朝田のぶ」も同様だった。勝つことばかりに夢中になり敗者の立場になる国あるいは国民のことを考える余裕は一切なかった。

しかし、朝田のぶの人間として優れている点は戦争に加担した過去の言動を徹底的に反省したことだ。彼女は子どもたちに戦争を賛美したことを悔いて、教師の職を潔く辞めたのである。日本のインテリ指導層の中には、日本の敗戦を知るや否やそれまでの言動をいち早く隠蔽し、変わり身を早くして、自分は一切関わらなかったかのように振る舞い、次にはもともと平和を希求してきたかのような態度を取った人間がいたのだ。世論をリードしたマスコミも同様だ。戦時中は戦争を煽り、戦後の平和が求められる時代になると、一転して過去を糾弾するかのような反日のスタンスに変化し、自分たちは国民の絶対の味方であるかのよう振る舞う。こういう、とくに新聞（例えば朝日新聞や

毎日新聞)、さらには反日の態度を鮮明にしている日教組に信を置くことが果たして出来るか。出来るはずもない。

朝田のぶは自分に誠実である。過去の言動に忠実である。これが人間本来の取るべき態度ではないのか。だから私は彼女を人間として心から信用する。

ここまで朝の連続テレビ小説の主人公について述べてきたが、この一文を書き起こした狙いは別にある。それはいまの日本の首相・石破茂氏に言及したいがためだ。この人物、何ら政治家として信用に値する点はない。政治家という前に人間としてまったく信用できない。昨年一二月五日の衆議院予算委員会での答弁には啞然とした。「あなた、自民党総裁選の時に公約したことを何一つ実行していないではないか」という野党の質問に対し、「公約は実行するものでもない。これまでもそのようにやってきた」と嘯いたのである。何をかいわんやである。これでは一定の結論を導くための候補者同士あるいは与野党間でやっている討論の意味がまったくない。石破氏の考えるところがまったくわからない。平気で過去の言動をウヤムヤにして平

気でいる感覚。こういう人間を政治家としてどう信じたらいいのか。石破氏という人間は自分自身に対してさえ信じていないのではないか。内面で何かが確立していない。行き当たりばったりで信念というものがない。だから他人の言葉に左右される。世間の評価では石破氏は幹事長の森山裕氏の傀儡だと言われている。何一つ自分で決められないのだ。また決める勇氣も度胸もない。これで首相が務まるのか。トランプ関税の折衝も無任所大臣の赤沢氏に丸投げし自分では交渉の場にも出向かず、交渉がうまくいかないと陰で「なめられてたまるか」なんて過激なことを叫ぶ。喧嘩を売っているのか。これでは交渉には決してならない。そんなことは政治の素人でもわかる。ひとつひとつの出来事に感情的に反応する人間なのである。日本政界のいやしくもトップならばもっと戦略的に動けないのか。失望させられることばかりだ。

かつて石破氏が防衛大臣の時、石原慎太郎氏がまだ存命であられた時、東京MXテレビで対談したことがあった。その際、石原氏の「尖閣は危ない状況だ。日本として尖閣に自衛隊を常駐することに言及すべきではないのか」との

質問に対し、石破はこう答えた。「私が首相なら中国が何と言おうと置くことに言及するでしょうな」と強い口調で言った。つまり設置する、と言ったのだ。この過去動画を引用して、日本維新の会の参議院議員・松澤成文氏が「このとおり実行してください」と迫ったが、法律上問題があるとか、中国を刺激したくないとか不測の事態が生じるので危険だとか、できない理由ばかりを挙げて結局何も実行しない。問題を逸らすことばかりで何もしない。万事がこの調子なのである。これが石破氏というウソで固められた政治家人生なのである。

物価対策が参議院選挙の争点になっているが、当初、石破氏自身も減税に傾きかけた。ところが森山幹事長に説得されて減税をやめたのだ。(その内容に驚く。三千万円の闇献金を申告しなかったためこのままでは税務署が動き脱税になるよと森山氏に脅かされたのだ)

減税は勿論、財務省にとってマイナスになるから、もしも石破氏が減税を実行するなら税務調査を実施し、それが即ち石破氏の命取りになる。だから減税を取り下げたのだ。

このように石破氏には信念がまったくない。他人に言われてすぐ同調する。もともとビジョンがないから簡単に同意できる訳だ。悩んだり、苦しんだりすることが一切ない。人は真剣に考えるから苦しむのだ。石破氏には苦しみというものが少しもない。

七月二〇日の参議院選挙の獲得目標は自公で五〇と言っているが、これに達しなくても首相を辞めることはないだろう。石破氏がやりたいことはただこの一点。内閣総理大臣を続けることだ。目的はそれ以外にない。こんな人間に政権の座を委ねた自民党議員に怒りを感じるとともに結局は自民党を政権政党に選んだわれわれ国民に責任があるということになる。

(令和七年七月一六日)

石破茂の真の狙いとは何か

七月二八日に自民党議員懇談会なる会合が開かれた。目的は参議院選挙敗北で議員たちに溜まっている不満のいわばガス抜きだった。執行部の第一の狙いはそこにあって開

催したと思われる。が、到底そんなことで収まるわけがなかった。議員たちは石破茂の首相辞任を期待していた。ここで辞めれば石破の恥づかしい終焉を見ずに済む、と思っていた。石破の名譽を首の皮一枚守ってやれる。しかし石破はここでも首相続投宣言をした。多分そうなるだろうとは議員たちも内々考えていたと思う。それまでの続投宣言で大体のところは予想していた。

ふつうなら総選挙で敗北した時点で辞任する。過去総選挙で敗れた首相は例外なくその責任を取って即刻辞任した。それでは、この粘り、首相の座にしがみつく真の狙いは何だろう。ここまで名譽を汚されて、首相を辞めろの大合唱にも耐えて日々闘う、この根底にある狙いとは何か。日本保守党の北村晴男議員によれば「醜い奇妙な生き物」とまで揶揄された、最低の評価。こんな悪評は過去まったくなかったことだ。これをものともせず頑張り通す。この粘りはどこから来るのか。私は石破の頭の中には八月十五日の戦後八〇年の「首相談話」がひとつはあると思う。石破は八月一五日時点において首相でいなければならぬのだ。七〇年の首相談話は安倍晋三氏が行った。安倍氏はそ

の談話を有識者一六人の様々な意見を十分にふまえ、さらに閣議決定を経て談話を発表した。談話発表までじつに慎重だった。その中でこう言った。「過去中国や韓国などに對して犯した罪を謙虚に反省するが、いつまでも過去に引きずられては双方の国にとってよりよい未来は訪れない。子や孫たちのためにそろそろ未来に目を転じるようにならない」

私が想像するに石破はこの談話が悔しくてならなかった。もともと超リベラルなこの男、なんとかこの談話を全否定したい。首相を目指した理由のひとつはここにあったと思われる。国民のための政治を実行するヴィジョンなど何もなく、ただ首相の座にしがみつきたかった。石破は安倍氏が嫌いなのだ。それは憎しみに近いかもしれない。安倍氏の第一次政権の時、同じく参議院選挙で大敗したことがあった。その際の石破の安倍氏に対する退陣要求は熾烈だった。語気強く、首相続投など許されるはずもない。あなたの頭はどうかしている、というニュアンスだった。安倍氏が恨みに思わぬはずがない。第一安倍内閣の閣僚だったとき石破にはいくつかの失態があった。しかし閣僚なら



百歩譲って許されるが、絶対に首相にしてはならない、と安倍氏は考えた。その器にあらずと骨の髄まで知ったからだ。石破は自分で蒔いた種ながらこれを恨みに思った。首相就任後に実施した、総選挙の際の公認取り消しなど安倍派つぶしにその思いは顕著に表れている。

恥も外聞もなく首相の座に固執する理由は、ここまでくると安倍氏の七〇年談話の全否定にあることは容易に想像がつく。そしてさらにこれはまったく私の想像だが、中国共産党から命令されているのではないか。つまり談話によって中国、韓国に対して行った戦時中の反省を全面に出して謝罪せよ、というものだ。石破はハニートラップやマネートラップに引つかかっていると推測する。このことで脅迫を受けているのではないか。首相の座に居座るための様々なパフォーマンスはただ中国に対する阿りが最終目的なのではないか。不名誉なハニートラップとマネートラップを全世界に向けて公表されることこそが石破のもっとも警戒しているものではないのか。

しかも石破は首相談話を誰にも相談せず、単独でまったく自分だけの考えで出そうとしている。実に危険だ。これ

によってふたたび勢いを増すリベラル派の攻撃に日本は晒されることになる。

それを見届ける形になる石破は、したがって、八月十五日を過ぎれば肩の力が抜ける。間違いなく八月末までには辞任する。私はそう考えている。

（令和七年七月三十一日）

#### 石原慎太郎氏が引用した短歌

残念なことにすでに亡くなられた石原慎太郎氏は、かつて国会で安倍晋三内閣総理大臣に対し、現在の日本の風潮について、世間がどつぷりと浸かってしまっている、自分さえよければいい、自分や自分たち家族さえ金儲けができ、その金で幸せになればいいといった我欲に満ちた墮落についてどう思うか、とその考えを質したことがあった。

石原氏はその時、すでに九〇歳になっていた、ある戦争未亡人の短歌を引用した。

「かくまでも醜き国になりたれば 棒げし人の ただに惜しまる」

端的に思いのすべてを表現した素晴らしい短歌だ。自分の夫をはじめ貴重な命を国のために捧げた多くの人々は今の日本が陥っている我欲に満ちた世界をどれほど嘆き残念に思っていることだろうか、という意味であろう。日本という、自分たち国民の生命と財産を守ってくれるよりどころである、この日本という国を愛することなく、自分たちのことばかりがすべてと考える多くの日本人たちはどういう人たちなのだろうか、ということだ。

石原氏ほどかつての自民党员の中で国を守るために実行動に出た人はいなかったと思う。毎日のように領海侵犯を繰り返して尖閣諸島を乗っ取るために現れる中国海軍に対し、非常な危機感を覚え、都知事だったころ当時私有地だった尖閣の一部を都で買い上げる決定を表明した。立場をなくすと考えたのか、当時民主党政権の野田佳彦首相は急遽国有化することを宣言し、現在尖閣は国の所有物になっている。これに対し中国共産党は大反発をしたことは記憶に新しい。こうした行動を始めとして石原氏は他の自民党政治家には決して真似のできない国を憂える行動をしていた。今してみれば石原氏のような国会議員は今の国会に

どれだけいるのだろう。自民党政権を見ればよくわかる。党利党略に終始し、石破をはじめ党幹部は政権の延命ばかりを模索している。そこには国民不在の姿しか見えない。なんと醜いことであろうか。

自民党や公明党の与党をはじめ、野党全部がもっと団結し国を憂い、国難ともいえる日本の貧困化や到るところに存在する国の分断分裂等々に立ち向かっていかなければならない。党利党略に陥っている場合ではない。このままでは国は亡びる。無名無力の私でさえそのように思う。情けないことではないか。

(令和七年八月三日)

石破茂に影響される若い人たち

昨年の総選挙で大敗し、今年六月の都議会議員選挙でも歴史的な大敗を食らい、そしてまた今年七月の参議院議員選挙でも大きく党員の数減らした、その責任者たる自民党の現内閣総理大臣の石破茂はそれらに対し一切の責任を取ろうとしない。こんな人物はかつて歴代の内閣総理大臣で

誰ひとり存在しなかった。

しかもこの男、かつて国政選挙で大負けした民主党の菅直人氏、自民党の安倍晋三氏、近くは麻生太郎氏に対し、「あなたは選挙で負けた。どうして首相を辞めない。どうしてその地位にしがみつくのか。内閣を私物化してはならない」と口汚く罵って退陣を要求した。そのブーメランがいまこの男に強烈な勢いで戻ってきている。にもかかわらず、われ関せず、自分とはまったく関係ないように動いている。恋々としてその地位にしがみついている石破茂という男はウソの塊だ。これまでの政治家人生を見ればよくわかる。権力欲だけは異常なほど旺盛で公約をその場だけにする口先だけの男だ。安倍氏が石破だけは内閣総理大臣にしてはいけないと二〇年前から語っていた。さすがに安倍氏は見抜いていた。石破も安倍氏の自分に対する思いを当然ながら知る過ぎるほど知っていた。だから旧安倍派の議員たちに裏金問題を前面に選挙で公認を出さなかったし、自民党内の保守派、すなわち旧安倍派を追い落とすためにさまざまな画策もした。まさに内閣を私物化しているのは石破自身ではないか。この男は醜い。日本保守党の北村晴

男参議院議員が石破を称して「醜い奇妙な生き物」といったが、実に言い得て妙ではないか。早く退陣させないと自民党は自壊する。もっとも時間とともにその時に相応しい政党人を選ぶことで世間は回っているのかもしれない。自民党はついに終わりの時を迎えているのかもしれない。

そして、日本という土壌、文にあつて恋々と地位にしがみつくその態度は醜悪以外の何者でもない。私が心配するのはこの醜悪な態度を見ている若い人たちに与える影響だ。過去に主張したことはいまの自分には関係ない、責任を取る必要なんてさらさらない、自分に都合よく世間を渡ればそれでよい、このような考え方がしかも模範となるべき一国のリーダーが日々平気な顔をしてやっている。この厚顔無恥を見てまだ世間の汚さを十分に自覚していない青少年がどんな影響を受けるか。適当に自分に都合よく生きるのが、正しい生き方なのだ、と甚だしい誤解をしてしまったら日本の美しい伝統文化はどこに行ってしまうのだろうか。そのことを危惧する。

石破は日本をよくするために首相になったのではない。自己の野心を満たすためだけに首相になった。政治家にな

った目的は首相になることだった。

（令和七年八月二二日）

国内四都市をアフリカのホームタウン化する愚策

八月二一日、横浜で行われたアフリカ開発会議（通称TICAD）で石破政権は以下の政策実施を表明した。これを知って私は愕然とした。外国人移民政策で大きな失敗を犯した、イギリス、フランス、ドイツ、スウェーデン等ヨーロッパ諸国の二の舞ではないか。いまだれほど移民政策で各国とも苦しんでいるか、どうしてその現状を理解しようとしなのか。犯罪の横行多発、安い賃金で一部の仕事を奪われたことによる国民の生活水準の低下、文化習慣の違いに基づく軋轢や摩擦で国民が苦しんでいること等が石破政権にはわからないのか。実際埼玉県川口市で起きているクルド人問題を見るまでもない。

石破政権は先般の会議で、山形県長井市をタンザニア、また千葉県木更津市をナイジェリア、新潟県三条市をガーナ、愛媛県今治市をモザンビークのホームタウンに指定

し、それぞれの政府と調印した。ホームタウンとは何を指しているのか判然としないが、おそらく労働力不足に悩む各都市にアフリカから移民を無制限に入れることではないか。これまでは優秀な頭脳あるいは特殊技能を持つ人々を日本に招き、日本の国力充実に役立つ人材のみを受け入れてきたと思う。ところが今回はそうした人々の他に単なる労働力強化のために受け入れの範囲を広げているらしい。差別発言につながる恐れはあるが、単なる労働力だけを期待する人々の人間性にはどうしても疑問符が付く。

それに木更津市をホームタウンとするナイジェリアは、例えばどういう国か、そこが問題なのだ。石破政権はどこまでそのことを理解していたか。ナイジェリアはアメリカのホワイトハウスが渡航危険として警告を発しているのだ。オバマ政権以降、現地のキリスト教徒が一二万五千人ほど虐殺されている。それにイスラム過激派の「ボコハラム」がテロを日常的に繰り返している。日本の外務省でさえ現地邦人に対し退避勧告を出している。そういう国なのだ。どうしてそういう国と友好関係を結び木更津市に呼び込もうとしたのか。これは木更津市だけの問題では勿論な

い。国内に住めばどこにでも移動する。東京にも横浜にもやってくる。日本全体の問題なのだ。しかもこれほど重大な政策を本家本元の木更津市民は知らされていなかった。政策が明らかになった後、木更津市役所には終日抗議の電話が殺到している。テロの頻発する国から無制限に受け入れたら、どんな異分子が紛れるか知れたものではない。結果、どんな犯罪が日常的に引き起こされるかわかったものではない。

このことは石破茂の極左グローバル政権のやりそうなことを証明している。石破デマゴグ内閣は単に目先のことだけを判断して各国にいい顔をして人気取りを図る。その結果、どれほど国民が迷惑を被るなんてことは少しも考えない。その程度の頭なのだ。だからどうしても石破を一刻も早く首相の座から引きずり降ろさなければ日本がどんな目にあうか知れたものではない。こんな重大なことを自民党議員たちはわからないのか。国民のための政治なんてものは石破の頭の中に少しもない。石破の政治生命が延びれば延びるほど日本は亡国の道を歩むばかりだ。

いまネットは大炎上している。しかしテレビ・新聞のマ

スメディアは一切報道しない。この国は本当に危ない状態になっている。数日後、日本保守党の党首で参議院議員の百田尚樹氏がネットで恐ろしいことを言った。石破政権が終わろうとするこの時期にこうした施策を導入する目的としては勿論、金銭のキックバックや利権の確保があるだろうが、究極は日本に対する復讐、俺をここまで苦しめた自民党の内外、つまり政界全体そして国民全体に対し、アフリカからの暴力や不法を導入することで大混乱に落とし込もうとしているというのだ。これは行き過ぎた考えのように私は思う。しかし石破の人間性からまったく考えられないことでもない。これが正直に思うところだ。

（令和七年八月二八日）

結局、JICAは各地域住民の猛烈な抗議でホームタウン構想を九月二六日撤回した。

小泉進次郎について思うこと

ドイツの高名な社会学者マックス・ウェーバーの言葉に従うと、「人間はふつうに考えるほど賢くない」そうだ。

これを小泉進次郎のケースに当てはめてみたい。まずもって私は小泉を無能な政治家と考えている。ある政治評論家によると、彼は俳優であるという。台詞を完全に記憶する能力があり、それを忠実に役柄に合わせその人物になりきることができる。だから根っからバカでもない。つまり周囲は話すべき台詞を小泉に提供し、それをその通り十分理解せずにそのまましゃべることは得意なのだ。しかしそこを外れ、いったん討論という形になると途端に馬脚を露呈する。何を話すべきか急にわからなくなる。当然だろう。ふだんから何も考えていないからだ。信念もなくふだん勉強もしていないから話を突っ込まれるとすぐ立ち往生の状態になる。不勉強の証拠に衆議院議員を一六年やっていて議員立法が皆無。真剣に政治に取り組んでいないから当然だろう。

この程度の頭でトランプやプーチン、習近平と正面から議論ができるのか。それは誰が考えても容易にわかる。官僚の書いた原稿には限界があって、すべてのシチュエーションを想定して台詞を用意することは不可能だ。例えばG7の会合で各国首脳が顔を合わせたときどんな場面でフリ

ーディスカッションに移行するか、そのときどんなトピックスが出るか、そんなことは予想もつかない。そのときまともに話すこともできないとなればどんな恥をかくか知れたものではない。それは国家の恥と同時に小泉自身の恥ともなる。これが日本国家のトップの首相なのか。日本もレベルがダダ下がりだな、と笑われる。日本国民としてこれは耐えられない。日本人としてはトップの人間が恥をかいてほしくはない。これがふつうの思い。石破はG7の欧米の首脳との議論を避けた。その理由は単に怖かったからである。しかし日本より経済レベルが格下の発展途上国の首脳とは臆せずに対話できている。安倍元首相が道を拓いたNATOの会議に参加せず、またG7に参加した時も欧米の首脳の輪に入ろうとしなかった。欧米への外遊もまったくなかった。勇気がなかったのだ。結果、日本の国益にまったく貢献できなかった。小泉も同じことになるのではないか。しかし能天気な小泉は平気かもしれないが。前述のとおり小泉は自分の信念なり考えがないから石破同様財務省のいいなりになって相変わらず緊縮財政に走るだろうし、公明党や財界のいいなりになって中国に阿り、

領空領海を侵犯されても何ら毅然たる態度をもって対峙できないだろう。これまでと同様、遺憾であると単に騒ぐだけなのではないか。アメリカに対しても同様だろう。アメリカの方は、そのシンパだから言うなりになるだけだろう。父親の純一郎と同じだ。進次郎自身がC I S S（戦略国際問題研究所）という米政権に影響を与える組織の研究員だったことからアメリカの協力者になると思われる。

とすると日本国民の貧困化に対応するよりも大企業優先の政策になりがちだ。物価高対策に目を向け、それを阻止する動きに出ることはまず考えられない。また企業献金に賛同を示してこれからは裏金、闇献金に染まる状況を作りやすくするだろう。だから石破政権と同じ道を歩む。日本国民にとって最も迷惑なのは本人が政治的無能であることに気づいていないことだ。気づいていたら総裁選に出るなどという暴挙には出ない。時期尚早なのだ。あるいは石破同様に単なる厚顔無恥のレベルとも考えられる。

石破のときに衆議院、都議会選挙、そして参議院と三連敗したが、もしも小泉が首相になれば同じ轍を踏むことになる。自民党はさらに惨敗し党がなくなるかもしれない。

にもかかわらず小泉を総裁選に持ち上げる一部の自民党議員の気が知れない。先を見通すことができない無能集団ともいえる。同じ失敗を繰り返そうとしているからだ。マックス・ウェーバーの言う通り、何度も人間は同じ誤りを繰り返すものらしい。人間の頭は思うほど賢くないということだ。

終わりに世間に小泉構文あるいは小泉ボエムと半ば笑われている言葉の一部を紹介してこの稿を終わりたい。かなりの数になるが一部にとどめる。

○このプレゼント、頂きものなんです。

○このエスプレッソ、飲んだらコーヒーの味がした。

○プラスチックって石油から作られているんです。これ

意外と知られていないんですね。

○朝目覚めてみたら、朝だった。

○誠実に答えないなんて不誠実ですよ。

○今日誕生日なんです。私も誕生日に生まれたんです。

○力をパワーに。

○辞任するとは言ったが、辞任するとは言っていない。

なお、私は決して小泉氏に敵対感情はもっていない。ただ、心配なだけだ。

(令和七年九月一五日)

### 気の毒な小泉進次郎

小泉進次郎（敬称略）は本当に気の毒だ。神輿は軽くて  
ペアがいい、なんて揶揄されながら自民党の総裁になろう  
としている。財務省や親中派議員、そしてアメリカ、中国  
に利用されようとしていることにまったく気づいていな  
い。これが軽いと言われる所以だ。

この人はとにかく自分の頭で物を考えるタイプではな  
い。総裁選の立候補記者会見も総裁選が始まって以降の討  
論も他人が書いた原稿通りにしゃべっている。だから想定  
外と思われる質問にはすれ違いの回答か、無言でやり過ご  
す。あるいはトンチンカンな回答になる。これを恥と思わ  
ないことがすでに異常だ。

京都大学の特別准教授で文芸評論家の浜崎洋介という人  
がいる。私はこの人の分析力には敬服している。極めて論

理的、説明も明快。その浜崎さんは進次郎を弟キャラ、あ  
るいは後輩キャラと説明している。どういうことかとい  
うと、他人からどんなに揶揄批判されても少しも悪びれず、  
何事もなかったかのようにすり寄っていけるというのだ。  
そしてその相手を立てる。立てられた方は勿論悪い気はし  
ない。つつい可愛いやつだな、になってしまふ。だから  
進次郎には敵がない。大変な人望があるのだ。それも半  
端ではない。彼を悪く言う人がまったくいないのだ。自民  
党議員、さらには野党の議員にも絶大な人気がある。

どうしてこういうキャラクターが出来上がったのか、浜  
崎さんは次のように分析する。進次郎は真綿にくるまれた  
かのように周囲に温かく見守られて幼少時から育った。彼  
に冷たく接した人間は皆無だった。それによって進次郎は  
人を恨んだり、敵対したり、そういう感情を抱くことは一  
切なく、伸び伸びと他人を疑うことなく育ったのだとい  
う。大学は関東学院で小学校から大学までエスカレータ  
だった。関東学院は（言葉は悪いが）もともと偏差値の低  
い学校で、努力しなくてもものんびり過ごせた。いわゆる青  
春を謳歌できる環境にあった。受験勉強で仲間といつとき



でも敵対する過酷な競争に身をさらしたことがなかった。いつも自分の思うとおりには何の障害もなく楽に進んでこられた。すべてに恵まれていたといっていいたいだろう。これほど運のいい人間も珍しい。

しかし小泉純一郎の息子にしては関東学院では物足りないということになった。そこで箔をつけるためにアメリカの名門コロンビア大学の大学院に留学することになるのだが、とても彼の實力では無理だった。にもかかわらず入学できた。そのわけは進次郎の父親が純一郎であったことだ。純一郎はそのとき日本の内閣総理大臣、その息子ということで将来は政治家になるだろう。そうであればアメリカにとつて利用価値がある。将来国益のために働いてくれるとアメリカのある筋は考えた。こうしてC S I S（戦略国際問題研究所）の一員として働き、アメリカの戦力になつてもらうことが入学の条件となつた。アメリカのために働くよう方向付けさせられ、そして完全に洗脳されたのだった。

また前述のように彼は素直に育っており、他人を疑うことを知らないから自分の味方になってくれる人の言うこと

には何の疑問も持たずに従う。このことは日本を陰で動かしたい人間にとつては進次郎ほど使いやすい人間はいないことになる。つまり進次郎はいくつかの集団に利用されるために自民党総裁選挙に立候補させられているのである。

そしてどうしても総理総裁になってほしい人間なのだ。その辺の事情を進次郎はどこまで認識しているのか、私には疑問だ。仮に首相になれば党首討論や予算委員会等の審議にろくに答えられないし、外交交渉にも始めからボロを出すし、恥をかきまくるのが今から容易にわかる。どうしてそんなことが彼にわからないのか、私は進次郎のために心底気の毒だ、と思わざるを得ない。操りたい集団は勿論まづはアメリカ。アメリカの国益のためにどのように進次郎を利用するかいまから考えている。次に財務省。緊縮財政に一層舵を切るだろう。増税路線だ。親中派にとつても使いやすい。中国が日本を呑み込み易くなるようステルスに仕掛けてくるだろう。進次郎では絶対に気づけない。それほど頭の悪いし、ふだんから考えてもいない。日本国をどう守るか端から彼の頭の中にはない。だから小泉進次郎が日本国の首相になったら日本国はますます衰退してい

く。いや、そのまえに自民党は壊滅する。自民党なら壊滅してもいいが、日本国が壊滅しては困る。なんとかして小泉進次郎の勝利を阻止しなければならないのだが、現時点の情勢を分析すると難しいように思える。このことを残念に思うのは私だけでは決してあるまい。

(令和七年一〇月二日)

### 小泉進次郎の落選

一〇月四日、自民党の総裁選挙が党本部で行われた。選挙前の予想通り、高市早苗と小泉進次郎の決選投票となった。一部では林芳正が二位に食い込む予想もあったが、ほぼ順当と言える結果だった。

ところで私は思う。どうして小泉はここまで強いのか。勿論、彼の弟キャラ・後輩キャラも影響しているだろう。人を立てれば人気は高まる。が、その前に彼の政治家としての資質が内閣総理大臣としての器に相当するか。これを小泉に投票した自民党員に考えてほしかった。彼は日本という国が現在直面している様々な困難や壁を乗り越えるた

めの解決策を持ち、そしてその解決策を実行する能力があるか、そのための勉強をしているか、それらすべてが私には疑問だった。芸能界でAKB48という人気グループがあるらしいが、そこでは人気投票が行われ、序列を決めているらしい。断じて異なるのは選挙が人気取りゲームではないことだ。場合によっては国家の運命さえ決定してしまう重要な選択なのだ。それを顔がいいとか、明るいとか、人を和やかにさせるとか、それらだけで決めてほしくない。

それにも関わらず、自民党の議員たちは何のためらいもなく、小泉進次郎に投票する。決選投票で結局は高市がわずかな差で勝利したが、これこそが不可思議なことだった。小泉が首相になったならば日本をどういう方向にミスリードすることになるかすではつきりしている。チームで対応するから問題はないと小泉は言うが、そんな甘いものではない。内閣総理大臣の職位を甘く見てもらっては困る。

決選投票は高市が議員票149、党員票36。一方の小泉は議員票145、党員票が11。つまり29票差だった

た。党员票でこれだけの差がつくのは党员こそよく高市と小泉の実力差を認識していたと言えるが、議員票ではわずか4の差しかなかった。

この事実をどう考えるか。小泉に投じた145人は一体何を見ていたのか、私にはまったく理解できなかった。多分、小泉につけば何らかのおこぼれがもらえて、党か内閣のいいポストに就けると計算したのだろう。145人は日本国家や自民党のことより自分の小さな利益を優先させただけなのだ。つまらない人間たちだ。しかしまあ、これが人間と言え言えなくもない。

私は小泉自身も自分が見えていないと思う。兄の小泉孝太郎が選挙結果を見て、正直ほっとしていますと言ったが、その気持ちはよくわかる。もしも進次郎が総理総裁になれば日本国はもとより彼自身の人生を傷つけることになったであろう。私は艱難辛苦して努力を重ね、総理総裁の器に相応しい能力を身につけるのが先決だったのではないかと思う。まだまだ総裁選に立候補するなど、おこがましいと言わざるを得ない。

小泉進次郎も彼に投票した自民党議員も国を導き、守る

という自分の立場をよく理解してさらに自分を磨く方がいい。

何はともあれ、高市氏が自民党総裁に当選してよかった。

(令和七年一〇月五日)

#### 高市氏当選の裏事情

一〇月四日、自民党総裁選挙が行われ、大方の予想を覆して高市早苗候補が総裁に当選した。この裏事情を分析する。

この日、第一回目の投票が行われ、五人の候補者のうち過半数の票を得た人がなく高市候補と小泉候補の決選投票に持ち込まれた。ここまでは予想通りの結果だった。そして誰もが決選投票で小泉候補が議員票を多く得て当選するものと考えていた。実際、決選投票に臨んだ際の小泉候補の自信満々な表情がそれを物語っている。

そこでまず第一回目の結果から見ておこう。一位が高市氏で議員票64、党员票119、計183、二位は小泉氏

で議員票80、党員票が84、計164。以下三位林氏で議員票72、党員票62計134、四位小林氏が議員票44、党員票15計59、五位茂木氏で議員票34、党員票15計49だった。だから高市氏は党員票で圧倒的に小泉氏を引き離していた。しかし決選投票になれば党員票の比重は極端に減ぜられ、議員票の比重が圧倒的に大きくなる。そのうえ菅元総理や岸田元総理や石破前総理が小泉を支援している（石破の場合は小泉と林の双方を支援していた）ことがはつきりしており、小泉氏有利は揺るがないところだった。

さて、ここで影響力が薄くなっていたと思われていた麻生元総理が陰で仕掛けた。前日麻生派の議員に党員票でトップを取った候補者に投票するよう指示を出していたのだ。ある意味これは当然と思われる。全国に散らばっている自民党員91万人こそ党のいわば民意と言っているものだったからだ。圧倒的に獲得した党員票を決選投票で覆せば、何のために党員票を反映させるために行われたフルスベックによる選挙の意味がないではないか。

さらにこれには伏線がある。一回目投票で麻生氏は小林

候補と茂木候補にささやいていた。恰好がつくように麻生派の票を二人にまわすから決選投票になったらその見返りに党員票トップの高市に投票してくれと要請していたのだ。一回目投票で高市が党員票トップとなり決選投票に進むことを事前に予想していたことになる。議員票でメンツを施した小林、茂木陣営は決選投票で高市氏に投票したのだ。一回目投票で林候補が獲得した議員票72が小泉議員票に加われば単純計算で152になり圧倒的に有利となる。これに他陣営の票が多少とも加われば小泉氏の勝利は揺るぎないものとなるはずだった。ところがここでも誤算が生じた。宏池会を牛耳っている岸田氏を面白く思っていなかった、かつての有力者がいたのだ。宏池会の元会長だった元幹事長の古賀誠氏である。古賀氏が林陣営に働きかけた。岸田氏にいつまでも舐められてたまるかという強い怨念だったと思われる。結果、林陣営のいくつかの票が高市陣営に流れ、逆転の構図を作った。岸田文雄は小泉氏の敗北により、従兄の税制調査会長の宮沢洋一氏とともに国民を増税で苦しめてきたが、ついに失脚し我々国民の目の前から消えることになる。正直なところ岸田氏はよほど悔

しかつたのだろう、ふつう勝者に祝いの言葉を即座に寄せるものだが、彼は二日間も沈黙した。因みに石破の時は当選直後SNSに祝辞を投稿している。

政治は政策以上にドロドロした人間関係が影響する。高市氏はその狭間で総裁の座を勝ち取ったのである。これによって麻生氏は副総裁に返り咲き復権を果たした。しかしこんな裏事情はどうでもいい。とにかく日本のために高市総理総裁（総理大臣指名選挙で勝たねばならないが、これは多分達成される）に頑張ってほしい。心からそう願う。

（令和七年一〇月七日）

### 公明党の連立離脱

二〇二五年一〇月一〇日、公明党は二六年にわたって自民党と続けてきた連立政権から一方的に離脱した。この決定に至る直前に公明党は高市自民党執行部に三つの課題を提起した。①自民党の政治と金のあり方 ②歴史認識、靖国神社参拝の問題 ③外国人との共生の問題の三つだった。このうち②と③は公明党の納得を得られたようだが、

①については政治献金の受け渡し先が本部と県連本部まではいいが、全国八千におよぶ支部にまで広げることは到底認められないということで、これを受けるか否か高市氏と鈴木幹事長に対して即答を求めた。回答の猶予を求めた高市氏に対し公明党はこれを拒否し、その場で連立離脱を申し渡したのだという。

私はこの報に接し、当初は意外なことだったから少しショックは感じたが、すぐにこれは自民党にとって朗報ではないかと考えた。従来から公明党と自民党はその政策にかなりの違いがあり、これまで自民党の政策に肝心なところで反対の立場をとってきたのが公明党だったからだ。公明党は創価学会が母体となってきた政党で、団体創始者の池田大作氏が強い影響力を保持してきた。池田氏の中国寄りの立場から必然的に公明党は中国共産党の代弁者となった。私に言わせれば、一九九九年にどうしてこんな政党と連立を組んだのか疑問に思わざるを得ない。石原慎太郎氏などは安倍晋三氏に対し「いづれ公明党は自民党の足手まといになる」と言っていた。麻生太郎氏も安保法制の議論の際、専守防衛に強い反対の立場をとった公明党に対し、

あれはガンだと言った。やりたい政策が反対され思うように政策が前に進まなかったのだ。間違いなく中国共産党の言わば出先機関のようなもので、例えば公明党は外国人に参政権を与える法案をそれまで二九回提出している。リベラル民主党の一五回、共産党の一回に比べても圧倒的に多い。

中国共産党の新疆ウイグル自治区、チベット、さらには香港から自由を奪ったやり方を見てもよくわかる。もしも中国共産党に日本が併呑されたら同じ運命を辿ることになる。公明党がどうしてそんな国の手先になろうとするのか到底私には理解できない。確かに経済面での恩恵はある。しかし自由を奪われて何が恩恵か。少しくらい貧しくなつたところで人権や自由を失った、香港になるよりはるかにましだ。第一、日本はそれに代わる方策を考えることができる。脱中国でいい。そこは大した国なのである。

だからそこを考えると、中国共産党の代弁者である公明党から一方的に離脱を言い渡されて高市自民党は実に幸運だった。これまでこちらから言い出せなかった問題だったからだ。これから高市氏は心置きなく自身の掲げる政策を

実行していけばいい。

高市氏は公明党の斉藤代表に「もしも総裁が私でなかったならば離脱はあったのでしょうか」と訊いた。これに対し斉藤氏はこう答えた。「いやどなたが総裁になられても同じだったでしょう」。これはウソだ。政治と金の問題は以前からあったし、これについては石破政権の時には一言も触れていない。小泉進次郎が総裁になったなら、なおさら操り人形であるがゆえに一切離脱など考えなかったであろう。ひとえに高市氏が中国共産党に対し従来から強い姿勢を示してきたからにすぎない。

高市氏が総裁に選出された一〇月四日、それから二日後の六日、駐日中国大使の呉江浩氏が国会を訪れ斉藤氏と面会している。そのとき高市政権に対する何らかの指示を出したのであろう。そこから離脱に向けて議論が深まっていたのだ。完全に公明党は中国共産党の代弁者だ。だから繰り返すが、自民党にとって公明党離脱は吉報だったのである。

そして最後に一言、中国共産党は公明党の離脱によって高市氏が総理になれないように画策したつもりだろうが、

高市氏は必ず総理、すなわち首相になる。私は確信する。他に誰がいるというのか。自民党議員もほかの政党の議員も日本のことをもっと真剣に考えるべきだ。

（令和七年一〇月一三日）

#### 玉木雄一郎の誤算

高市氏は自民党総裁に当選した後、野党各党にあいさつ回りをした。国民民主党を訪れた際、党首の玉木氏が「懸案のガソリンの暫定税率廃止と103万円の壁廃止についての三党合意を実施いただけますか」と訊いた。高市総裁はたった一言「御意」と答えた。極めて好意的だったし、これで国民民主党の政権入りは間違いないと私は思った。勿論、これは公明党の連立離脱前のことだったが。このとき玉木氏は迷っていた。連合の芳野友子会長から自民党との連立はまかりならんと釘を刺されていたのだ。もともと優柔不断の玉木氏のことだ。なかなか前に進めなかった。フラフラしているうちに立憲民主党から野党三党（立憲、国民、維新）で連合して新たに政権を作らないか

との誘いを受けた。しかも首班指名には玉木氏の名前を書くと言われたのだ。ここで俄然色気が出てきた。それでも建前上、国民民主と立憲は安保法制とエネルギー対策で決定的な違いがあり、これでは一緒になれないと主張した。当然だろう。国民民主が当時の立憲民主党から離脱したのもこの二つの明確な違いがあったからだ。しかし立憲が国民民主に歩み寄ってくれることは無理と知りつつも色気を出し続けた。もし万一步み寄ってくれたら立憲の提案に乗って、あわよくば自分が総理になると夢見たのである。それでも無理は残る。仮に野党連合が形成され、政権ができてもしこれは烏合の衆であり、もともと目指すところが決定的に違うのだから早晩瓦解することは目に見えている。だから玉木氏をあまり賢くないと私は思った。高市総裁の思惑に沿って政権入りし、まず閣僚を務め、そこで実績を上げ、その後に内閣総理大臣を目指しても遅くなかった。それが待てないということは実際には国民に目を向けていないということだ。政権に入れば多分財務大臣のポストが用意され、比較的楽に懸案事項の解決がなされたのではないか。

余談だが、それでも高市自民党は二つの懸案事項は解決に向けて動くとは思う。

「公明党が離脱したから、我々が連立に合意しても意味がない」と玉木氏は後に主張した。しかしこれは明らかに言い訳だ。国民民主が連立を組めば、首班指名の一回目投票で過半数に届かなくても結局二回目で高市氏が総理に当選する。そうすれば国民民主の政権内の立場は確立する。そしてそれが国民のためにもなる。玉木氏は自分の総理になることを優先して国民を見捨てた格好になったわけだ。さらには維新の会が高市自民党と連立を組む情勢になったことで、あるうことか自民党を離れた公明党と連携を模索すると公言したのだ。玉木氏のこれまでの理念や信念はどこへ行ったのか。記者会見の場で玉木氏がするように公言したとき、傍らにいた榛葉幹事長はその発言を制するように玉木氏の腕を抱え、別室に連れて行った。榛葉氏が公明党との連携を嫌っていることは明白だった。これでますます玉木氏は男を下げた。私も正直、玉木氏には失望した。国民の利益に直結するガソリン暫定税率や103万の壁より自分が総理になることを優先させたのだ。

（令和七年一月一八日）

城内実氏と片山さつき氏

一〇月二一日、高市内閣が発足した。四日、自民党総裁に就任して以来、一七日を要したことになる。自民党が衆参ともに少数与党に転落したためだ。ここではそれ以上は述べない。それより城内実氏と片山さつき氏の関係を私なりにやや危惧している。

というのも両者はかつて因縁の関係だったからだ。それは小泉純一郎内閣の時、郵政解散が行われたが、それに関係している。私も何度か記述しているように郵政民営化は全く意味がなかった。米国企業の日本参入を手助けするために実施したようなものだったからだ。城内氏は郵政民営化に疑問を持った。実際に民営化法案は衆議院で可決したが、参議院では否決された。小泉氏はどうしたか、衆議院を解散してこの法案の是非を国民に問うたのである。いわゆる郵政解散である。城内氏は衆議院で可決されたとき、反対し造反議員となった。勇気と決断力のある人といって



いい。激怒した小泉氏は城内氏を除名し、選挙では城内氏の選挙区に当時大蔵省職員だった片山つき氏を刺客に立てたのだ。片山氏は当選し、城内氏は落選となった。わずかに数百票の差だった。城内氏は次の選挙までただの人になったわけだ。しかし次の選挙では逆に片山氏を破り、見事再選を果たした。片山氏は後に参議院に鞍替えし現在に至っている。この過去があつて二人に何らかの意図がないはずがなかろう。ところがこの二人が今回、同じ高市内閣で城内氏が成長戦略担当大臣、片山氏が財務・金融大臣となつたわけで政策的に積極財政が肝であり、うまく連携が取れるのか私は危惧している。片山氏はかつて大蔵省にいて緊縮財政に加担する立場だったが、今では積極財政に転向している。だから総裁選挙でも高市氏に応援し、今また内閣に入った。彼女は元主計局主計官までのぼりつめたエリート官僚だっただけに財務省の内情に極めて詳しく、様々な情報を高市氏に提供し内閣の一員として大いに活躍するだろう。そのことはいいとして、やはり城内氏との関係は十分に気を使つていかねばならない。しかし二人とも並外れた知能の人たちなので大丈夫だろう。私の危惧なんて余

計なことかもしれない。そして案外、このことは高市総理の仲良くやってくれとの無言のメッセージのように思う。

(令和七年一〇月二二日)

#### ハンス・フォン・ゼークトの言葉

ゼークトはワイマール共和国の元上級大将。幾多の対外戦争で故国を勝利に導いた名将だ。

彼はこう言った。「無能な怠け者はそれでも使い道があるが、無能な働き者は死刑が相当である」。随分と上から目線であるが、それだけの実績を残した偉人であるから目を瞑る。この言葉の意味するところは、人間というのは真に有能と言える人物は数少ない。そして殆どが本質的に怠け者である。無能な怠け者は、無能であるがゆえに自分の力量なり立場をわきまえており、何ら疑問もなく流されるように日々を送っている。上司から言われた命令に対しては極めて従順でその指示内容をそのまま実行する。したがって使い道があるというわけだ。ところが、無能にもかか

わらずいろいろ口を出したり勝手に動いたりすると無用なトラブルになる。こういう人物は国家なり、企業なりの足を引っ張る。この人物は以下のような特徴を持っている。

① そもそも自分が無能であるという自覚がない。自分を客観視できていない。

② というよりも自分は優秀であると錯覚している。

③ 大概において高学歴の人が多い

この特徴に典型的に合致する人物を私は直近で見ている。前首相の石破茂である。どれほど世間から批判を浴び、さつさと辞任して首相の座から去ってくれ、それが国家のためになると言われても自分を理解していないから批判をどこ吹く風と受け流す。その厚顔ぶりは目に余った。テレビ・新聞（特にTBS、テレビ朝日、NHK、朝日、毎日新聞）などのいわゆるオールドメディアと称されるマスコミはそろって左傾向だからちやうど石破に合致しただろう。オールドメディアは彼に比較的好意的だった。そのため、自分是有能であると完全に誤解した。一方、国民の大多数はその顔を見るのもウンザリだとネットで連日喧伝していたのにまったく気にしなかった。自分が有能で正しいことをし

ていると思っているからどうにもならない。公約の殆どを実行しなかった。物価は高騰し国民が生活に困窮しているもそれは自分が悪いからではないと信じていた。後を継いだ高市首相はその遅れを取り戻すべく連日大車輪で各種政策を実行しようとしている。健康を損ねないかと心配するほどだ。

石破のような人間はたまにいますが、こういう人間が国家を衰退させる。ゼークト大将のまったく言われたとおりだと思った。世界各国、人間という動物は共通して愚かな部分があるといつてよいのだろう。

（令和七年十一月一日）

#### 橋下徹の阿り

一月七日の高市首相の衆議院予算委員会における答弁で存立危機事態に言及した内容が中国を刺激した。過剰なまでの反応だった。やはり日本にいざというとき台湾への侵攻作戦には加担してほしくないのだ。ではどうしてこんな問題に発展したのか。立憲民主党の岡田克也議員が高市

さんから問題発言を引き出したからだ。そのとき執拗に質問を繰り返し、存立危機事態まで踏み込むよう誘導した。その目的は明白だった。高市内閣の退陣だ。高市内閣に危機意識を持っている中国の味方になって高市さんを引きずり下ろしたかったのだ。というのも岡田の一族がイオンのオーナーであって中国でビジネスを大々的に展開したい。すでに二〇箇所で開催済みであり、今回も湖南省長沙市で東京ドーム五個分の規模のイオンモールを新規開店予定なのだ。そうしたビジネスにとってマイナスとなりかねない高市内閣は早期に潰さねばならない。

この動きに呼応するかのように政治評論家の橋下徹が高市内閣批判を執拗にかつ強烈に繰り返している。その発言の趣旨はこうだ。日本は弱い、中国の軍事力に勝てると思っているのか、そんな状態で喧嘩を吹っ掛けるような言い方をして日本が戦争に巻き込まれたらどう責任を取るのか。

しかし高市首相は日本が中国に単独で立ち向かうなどとは一言たりとも言っていない。ましてや朝日新聞電子版が記事にしたような武力行使などは一切言っていない。発言

の裏には万が一にも同盟国アメリカが中国と戦闘状態になった時には日本が存立危機事態に巻き込まれると言っているにすぎない。これまで確かに日本は台湾情勢についての明確な立場表明をしてこなかった。いつもあやふやにして逃げ回っていた。しかしいつまでも態度表明しないで済むはずもない。事態はそこまで切迫してきているからだ。日本がアメリカに加担しないとしたら次に尖閣や沖縄が中国に攻められたときにアメリカは日本を見捨てる。だからこれは逃れられない。これが同盟国というものだ。

しかしそれにもかかわらず橋下徹は高市内閣を責め立てている。橋下は保守だ、と以前の私は思っていた。ところが最近の橋下は反日姿勢が目立つようになり、左派リベラルに転向したとしか思えない。

つい最近、中国のSNSで次の一文が載った。真偽はともかく、日本の政治家あるいは官僚でハニートラップやマネートラップの恩恵にあずかった者の氏名を近々公表する、というものだ。が、私はまず公表はないと思う。公表したなら効力がなくなる。公表せずに脅している方が効果は絶大なのだ。橋下徹はまず間違いなくハニートラップに

引つかかっていると思う。大阪市長のとき、審査基準は満たしていたというものの上海電力という中国資本の会社を大阪に導入した。相手は中国。危険極まりない。電力事業などという都市機能を左右するインフラ事業に中国資本を使うなど政治家としてあり得ない。どうしてそういうことをやったのか、答えは明白。ハニートラップに引つかかっており、それが無言のプレッシャーになっていたのだ。今回の高市発言にしても同様である。習近平の顔色を窺って高市政権の少しでもマイナスイメージになるよう努力している。

私は誤解していた。橋下を損得にとらわれない信念の政治家と思っていたが、実はそうではなかった。あるいはマネートラップにも引つかかっているかもしれない。恐らくそうだろう。そうでなければ何ら間違った発言をしていない高市首相をここまで責めることはないはずだ。橋下にしてもそんなことはとくに知っている。高市首相は言い訳ではなく反論も中国に伝えている。そして正しいから発言の撤回もない。至極真つ当だ。にもかかわらず橋下徹は執拗だ。そしてもう一言付け加えると橋下は石破政権の時は

何ら批判らしい批判をしていない。理由は明白。石破は中国にとつて毒にも薬にもならない、取るに足らない存在だったからだ。だからこそ高市首相にはこれからも日本のために頑張つてほしい。くだらない反日勢力に負けないでほしい。

(令和七年一月二五日)

## ●歴史上の事実

### 誰袖の数奇な運命

今年のNHK大河ドラマにも登場した吉原の遊女・誰袖(たがそで)について、その数奇な運命を辿ってみたい。誰袖は大変な美形だったらしい。何しろ呼び出し花魁だった人だから容易に想像できる。本名は何でこの生まれで没年はいつかなど一切記録に残っていない。しかし一七八〇年代が彼女の全盛期だったことはわかっている。その時に彼女は狂歌で名を挙げ、ついには呼び出し花魁にまでなった。花魁になるためには何か特技があつて、それで客を

呼び寄せる。小唄、三味線、踊りといった諸芸だ。誰袖の場合は狂歌だった。これが江戸で流行したとき、狂歌の名手として客を引き寄せたのだった。

ところで考えてみたい。女郎がどうして江戸に生まれたのか。農民が人口の八割の時代、農家は少しでも労働力を必要としたからどの家でも子沢山だった。しかしこの状態で、もしも天変地異あるいは天候不順などで飢饉が起きればどうなるか。食料扶持を減らすために長男以外の男は家から追い出され、と同時に金に替えるために女子は売られることになる。一役買うのが女衞である。女衞が農家をまわり、片端から娘を買うのである。対価は五両から十両で一両が現代価値で十万円程度だからさほどの金額ではなかった。それでも飢え死によりましたため農民は涙を呑んで娘を売る。売り先は女衞が決める。器量の悪い娘は江戸に四つあった岡場所か、あるいはどこか宿場の飯炊き女（雑用兼女郎）として売られ、器量よしの娘は吉原に行く。吉原では一〇歳以下なら禿（かむろ）となり、一五歳くらいまで姉役の女郎から行儀や諸芸を習う。一五歳になった時、最初の選別が待っている。器量よしで筋がよさそうな

者は振袖新造という花魁予備軍にされ、そうでない者は留袖新造という中級以下の女郎の道を歩まされる。留袖となればまさに苦界の道だ。何故なら客一人当たりの稼ぎが少ないので振袖に比べ客を多くとらねばならないからだ。

二七歳くらいになると身売り額の返済も済むので年季明けとなる。その前に金持ちに身請けされればよいが、それはまれでたいていの女郎は年季明けを待たずに病死してしまう。病死となるのは、年季明けまでにほとんどの体力を搾り取られるからだ。女郎の平均寿命は二二歳程度だったという。それもそのはず、妓楼の持ち主は掛けた金を回収できる前の逃亡を恐れ、体力を付けさせないよう運動をさせなかった。女郎たちは一様に「膳ひとつ運べない」くらいにひ弱だったという。まことに気の毒な運命だった。

さて戻って、誰袖のことだ。彼女は大文字屋に売られた。大文字屋は妓楼のうち、格付け最上位の大見世に分類されていた。主人は二代目大文字屋市兵衛で、誰袖にとって幸運だったことは市兵衛が狂歌に入れ込んでいたことだ。誰袖は三味線や踊りは苦手だったが、才があったのだ。

ろう狂歌には秀でていた。市兵衛は金をかけて誰袖を育て上げたのである。

誰袖はこんな狂歌を謳った。

「色よりも 香こそあはれと 思ほゆれ 誰が袖ふれし宿の梅ぞも」

市兵衛はこの歌が気に入る、それで彼女の源氏名を誰袖とした。もっとも袖に入れる匂い袋を誰袖といったことから採用したとも言われている。

一七八三年ころには狂歌が江戸で大流行した。狂歌を詠む花魁が大文字屋に在るとの評判から誰袖は大変な人気者になった。彼女に会いたいと多くの男たちが列を作るような有様だった。さらにその年には二三人の作家による七四八首の狂歌が掲載された万載狂歌集なるもの（千載和歌集の向こうを張ったものか）も発行された。歴史に残ったその歌集には誰袖の狂歌も掲載された。掲載を決定した選者は四方赤良と朱楽菅江の両名であった。

掲載された誰袖の歌が次の狂歌である。

「わすれんと かねて折りし 紙入れの などさらさらに人の恋しき」

この時期が誰袖の全盛期といってよからう。

だが、彼女の運命を一気に変えてしまう人物が現れる。

老中・田沼意次の側近で勘定奉行だった土山宗次郎だ。土山は名門の出ではなかったが、実力でその地位に上り詰めた。なかなかの実力者でロシアの南下政策に対抗する案を幕府に提出するなどの動きも取っていた。一方でその立場を利用して賄賂を不正蓄財しているとの噂も絶えない人間でもあった。この男が誰袖に急速に接近しつつは身請けするとまで言い出した。土山は彼女を自分の妻にしようとしたのである。勿論、この申し出を受けたとき大文字屋の市兵衛は反対した。旦那、この女にいくら金をかけたと思いですか、半端な金では申し出を受けるわけにはいきませんぜ、というわけだ。土山は言った。

「一二〇〇両でどうだ。無論、手続き料まで含めた金額総量だが」

市兵衛には一も二もなかった。あまりの金額の多さに肝を潰したくらいである。この話は江戸中の噂になった。江戸庶民で知らないものはなかった。蔦屋重三郎の盟友で歌人の大田南畝はこの出来事を感じ込めて狂歌にしている。

「わが恋は 天水桶の水なれや 屋根より高き 浮名にぞ立つ」

誰袖は狂喜した。これでやっと自由の身になれる。どれほど土山に感謝したことであろうか。どんなに自分の好きな歌を詠んだところで吉原の狭い空間での毎日の不自由さに比べれば、解放される自由はどんなことにも代えがたい。

しかし、この幸せは長くは続かなかった。自由になった二年後、將軍家治が死去し、それに伴って田沼意次が失脚し、世間は一気に自由享樂から緊縮に移行した。田沼に代わって老中になったのが松平定信だったからだ。定信はこれまでの奢侈贅沢を一切否定した。当然賄賂などの不正は絶対に許さなかった。定信の時代空気を謳った有名な狂歌がある。

「白河の 清きに魚の すみかねて もとの濁りの 田沼恋しき」

田沼の失脚に連動して土山が逮捕された。一時逃亡したが、すぐに捕縛され、コメ代金五〇〇両着服横領の罪で斬首された。誰袖にも追及の手が伸びた。解放されたいため

に土山をそのかしたのであるという疑いだ。勿論そうではなかった。が、そんなことは無視されて一方的に定信の裁定が下った。あろうことか身請けの事実が否定され、再び吉原に戻されたのだ。誰袖の屈辱は目に見えるようだ。そして以後、誰ひとりとして客がつかなかった。毎日が飼い殺しになったのだ。嫉妬の渦巻く吉原にあって彼女の居場所とは花魁の時の個室だったのか、それとも大部屋に置かれたのか定かではない。他の女郎の手前もあって苦しい毎日であつたらう。市兵衛は彼女をどのように扱ったのか記録がない。使い物にならなくなった彼女をそのまま解放したのか。しかし解放されても彼女は一文無しだった。それとも何か他のことに利用されたのか不明である。ただ、彼女は思ったことだろう。不自由であつてもあのときそのまま花魁の身分で人生を終えればよかった、と。

（令和七年八月九日）

#### 四〇年を経過して筆者が初めて知った悲劇

四〇年前の八月一二日、東京発大阪行き日航一二三便が群馬県上野村の御巢鷹山山中に墜落し、乗員乗客五二〇名が命を落とした。有名人もあり、歌手の坂本九氏もその中に含まれていた。遺書を紙切れに残した人もいた。この人は死を目前にした切羽詰まった中で妻に対し、遺される子供の将来を託していた。立派だ。そういう人はマスコミが取り上げ、私も美談として記憶に強く残っている。一方、一度に三人までも愛する娘を失った夫婦が大阪にいた。四〇年が経ったいまになってマスコミが取り上げたのだ。私はこの理不尽を初めて知った。

亡くなったのは田淵陽子さん（二四）、満さん（一九）、純子さん（一四）の三姉妹だ。妹思いの陽子さんはいつもボーナスをもらうと妹たちに旅行のプレゼントをしていた。その時も三人で千葉の浦安にある東京デイズニールランドを訪れていた。さぞ三人で楽しかったことであろう。嬉しそうに微笑む写真が遺品の中から見つかった。

そのころ大阪の自宅では母親が帰宅する娘たちのために夕飯の準備で忙しかった。日航機は東京羽田を午後六時発（実際の離陸は午後六時一〇分）で大阪伊丹空港着は午後七時三〇分ころを予定していた。それに合わせて何日かぶりに夫婦ともども五人の楽しい食事が待っていたはずだった。ところが、午後七時少し前にテレビのニュース番組に日航機がレーダーから消えたとの情報が入った。勿論、娘たちがそれに搭乗しているとは気づいていない。飛行機は沢山飛んでいる。まさか娘たちの搭乗している機体とは決して思っていない。

しかし午後七時三〇分ころだったであろうか搭乗者名簿が発表された。テレビに娘たちの氏名が出たときはあまりの衝撃で言葉にならなかった。夫婦は文字通り目の前が真っ暗になった。これまで一生懸命に気立てのいい優しい娘になるように手塩にかけて育てた。その大切な娘たちの三人が三人ともすべて自分たちの前からいなくなったのだ。いや、そうではない。死亡するなんてあり得ない。絶対どこかで生きているはずだ。まだそう信じていた。

その時、夫の親吾さんは五六歳、妻の輝子さんは娘さん



たちの年齢を考えると夫の親吾さんよりもずっと若かったであろう。したがって、ご夫妻にはまだ何十年かの人生が残されていた。娘たちには幸せな結婚をしてもらい、孫の顔も見たい。そういう夢を描いていたに違いない。

だが娘たちが未だ時間どおりに帰宅しないことから、日航機搭乗は間違いなかった。何という理不尽であろうか。神も仏もないと思った。自分たちがどんな悪いことをしたというのか。

もしもこの状況に自分が置かれたら私はどのように対処したであろうか。おそらく何もかも放棄したい気持ちになると思われる。生きていても仕方ないと思うかもしれない。こんな運命に自分たちを陥れた神仏を恨んだかもしれない。

四〇年前に発生したこの墜落事故以来、日本で大きな航空機事故は起きていない。勿論、小規模の事故はあった。

しかし五二〇名もの死者が出た事故はない。文字通り空前絶後だった。どうして滅多に起きないそんな事故に自分たちの娘三人が巻き込まれねばならなかったのか。どれほど理不尽を感じ、この世の無常を感じたことであろう。

今年、夫の親吾さんが九六歳でこの世を去った。さぞ無念だったことだろう。そして妻の輝子さんは独り老いたまま残された。しかし夫婦はよくここまで生きたと私は思う。よく頑張った。私などは同じ立場だったら生きる気力を失ってとっくの昔に死んだであろう。夫婦は何を生きがいにしてここまで来たのであろうか。その強さに感服する。人生は理不尽である。神あるいは偉大なる存在は必ずおられると私は確信している。にもかかわらず神は人に時折こういう悪さをされる。何故なのか。どういう目的があるのだろうか。残された、その人の生きざまをじっと見ておられるのだろうか。運命とか宿命とか、そうした関連の書物をかかなりの数、私は読んだ。しかしどれほど読んでも未だに理解できていない。

(令和七年八月一六日)

#### 長嶋茂雄夫妻の闇

長嶋茂雄氏が今年の六月三日、この世を去った。肺炎だった。数日が過ぎて葬儀が行われたのだが、私にとって奇

異に思えたことは喪主が次女の三奈さんで、長男の一茂氏ではなかったことだ。

後になって長嶋家の過去に起きた出来事を知って合点がいった。一茂氏は長嶋氏が好きではなかったのだ。彼は母親を心から愛しており、父親にはそれほどの愛は感じていなかったようだ。明確な理由があった。茂雄氏にはかつて愛人がおり、一茂氏はそのことを許せなく思っていたのだ。茂雄氏が六八歳で脳梗塞に倒れた時、その場所が愛人宅だった。通報を受けた一茂氏は恥ずかしい思いに捉われ、世間体もあって一旦茂雄氏を自宅まで運び、そこから病院に搬送させた。そのことが結果的に茂雄氏の病状を悪化させたと思われる。右手の麻痺も呂律の回らない言語症状も病院への搬送が遅れたことが原因だった。搬送が早ければ症状はもっと軽かったに違いない。

妻亜希子さんは茂雄氏の愛人問題が明らかになったことで大変なショックに陥った。ということは亜希子さんが茂雄氏の不倫にそれまで気づいていなかったことになる。

二人の夫婦関係はそれまで必ずしもうまく行っていなかった。私の想像では二人は結婚を急ぎ過ぎて相手の性格や

趣味、価値観などを十分に理解していなかったと思う。昭和三十九年の東京オリンピックの際にIOC委員付のコンパニオン五人のうちのひとりに選ばれた亜希子さんに茂雄氏が目ぼれをした。その時点からオリンピック会場内にいる亜希子さんをずっと追い回していたようなのだ。彼女は出版業界で成功を収めた父親によってエリート教育を受けさせてもらった。アメリカへの留学もあり、英語、フランス語、スペイン語に堪能だった。将来は外交官が夢だったようなのだ。それが茂雄氏の猛烈なアタックを受け、知り合ってわずか四〇日後には結婚の記者会見を行う有様だった。これでは相手を永遠の伴侶に相応しいかどうか、見極める時間がなかったのではないか。

茂雄氏は国民的英雄としての立場から日々多忙を極め、一般人のような安らかな家庭生活など夢のまた夢の状況だった。それは容易に想像できたはずなのだが、考える暇さえ亜希子さんにはなかった。プロ野球巨人のスーパースターの妻という想像もできない生活、すれ違いの生活は彼女に精神的負担を与えることになった。

六八歳で脳梗塞に倒れた茂雄氏、そのとき亜希子さんは

六二歳だった。もともと膠原病という病に苦しんでいた彼女は、ついに別居を決断する。表向きの理由は膠原病の身体が階段のある自宅では足腰に負担が大きいというものだったが、実際には茂雄氏の不倫が原因だった。別居してしばらく経った時、一茂氏夫妻が母親を久しぶりに自宅に招き、食事を共にした。亜希子さんにとっては久しぶりの安息な時間だったであろう。しかし悲劇はその直後に起きた。帰りのタクシーのなかで心不全を発症したのだ。病院にすぐ搬送されたのだが、そのまま帰らぬ人になった。六四歳だった。それまで体調はふつうで亡くなるような重い症状はなかったから、一部には自殺説も流れた。亜希子さんは優しい、潔癖な性格だったに違いない。旧姓西村亜希子さんはふつうの人と結婚し、夢だった外交官を一生の仕事にすれば彼女はまったく違った人生を歩めたはずなのだ。あの時、東京オリンピックで茂雄氏と出会うことがなかったならば彼女は自由で好きな道を歩けたに違いない。運命はどこに暗転の芽を抱えているかわからない。

以来、父親好きだった次女の三奈さんと母親好きの一茂氏は決定的な仲違いをするに至った。これから財産分与で

も骨肉の争いも起きかねない状況なのだ。(一茂氏は資産家なのでその心配はないと思われるが、こと金銭問題は別かもしれない)

長嶋茂雄氏についても一言しておかねばならない。先日追悼番組を見た。録画の中で聞き手が「長嶋さん、プロ野球巨人のスーパースターとしての人生は楽しかったですか?」と訊いた。この問いにすぐ返事はなく、しばらく間をおいて「そうですね」と答えた。私はそのやり取りから、茂雄氏自身もスーパースターの役割を果たすのに仮面をかぶりつつ行わねばならなかったことが彼の人生を重いものにしたのではないか。常に人気者でファンを楽しませねばならない、弱気を見せてはならない立場は彼の人生を辛く厳しいものにしたのではないか、と感じた。

最後に付言したい。当然のことながら、長嶋氏の野球界に遺した偉大な功績と私生活とは切り離して考えねばならない。

(令和七年六月一二日)

## ●読後感

芦沢央氏「神の悪手」について

自分は幼少時から将棋が好きで小学生位まで夢中だった。身の回りにいるほとんどの人たち、すなわち親兄弟、学友、近所の大人たちとの将棋で負けることはなかった。それで結構おだてられた。将来、将棋で飯を食べるかもしれないぞ、と。これは親ばかだった。だが、さすがにその言葉を鵜呑みにしなかった。小学生の子どもでもその世界の厳しさはわかる。将棋で生活することは並みの努力で実現できることではない。

第一、無名の一般人に勝てたところでなにほどのこともなかった。やはり結局よかった。もし奨励会の組織にでも入り、真剣に取り組んでいたら恐らく自分の人生が地獄になったであろう。藤井聡太六冠のような人物は極めて稀で、多くの人々は奨励会にさえも入れないし、そこで四段に昇格することも困難。万一奨励会で四段に昇段したとし

てもプロで一人前になることはさらに難しい。

奨励会とは棋士の養成機関だ。小学生将棋名人戦や中学生将棋王将戦などで優勝した全国各地の「天才将棋少年」たちが入会してくる。しかし最終的にプロになれるのは、その中で半年に二人しかない。そして満二六歳の時点で三段リーグ終了までにプロにならなければ強制的に退会を命じられる。

ただし例外がある。二六歳を超えてもリーグ戦の勝ち越しを続けている限り、在籍を延長できるのだ。芦沢氏の描いた「神の悪手」に登場する村尾康生はその条件を辛うじて満たしていた。彼は二九歳になっていよいよ四段に昇格するための最後のチャンスを迎えていた。

退会を強いられると、かなり悲惨である。奨励会のメンバーは殆ど将棋しかやってきていない。だから彼らの殆どは学歴がない。村尾もそうだった。中学を卒業して将棋の世界に飛び込んだ。したがって就職経験もない、中にはアルバイトさえ経験していない者もいる。奨励会を放り出された時、この先どう生きていいのかその術を持っていない。

幼少時、なまじ将棋が強くて負けたことがないことで周囲から将棋の才能がある、将来日本の将棋界を背負う人材だ、などとおだてられ、本人も自分は十分将棋で身を立てられると錯覚したときに悲劇が始まる。

つまり奨励会にいる多くの者は二六歳まで将棋以外何も知らないのだ。才能がないと悟った者、あるいは才能を開花するに至らなかった者は、将棋を早く見切ることが大切だ。これが人生の分かれ道であろう。しかしこの見切りが意外と難しい。これまで寝食を忘れて打ち込んだ将棋だからこそ決別することは、打ち込んだ熱量によっていよいよ不可能となる。

村尾康生の場合も同様だった。アパートの家賃を滞納しガス、水道、電気も止められた。親兄弟はあきれ、とうとう彼を見捨てた。そしてついには大家からアパートを追いつ出され、今はマンスリーマンションの狭い一室でかろうじて逼塞している有様だ。だから、今回の四段昇格の機会を最後と捉えてどうしても勝たねばならなかった。彼は二戦を残して一三勝三敗、暫定二位で、もうひとりの棋士・山縣と並んでいる。もう少しだった。出来れば山縣と二人この

まま四段になりたい。だから、仮に次の対戦で暫定一位のライバルの宮内が敗れ、さらに最終戦で自分が宮内に勝てば四段昇格が近づく。

宮内は天才といえるだろう。一一歳で将棋を始め、中学高校ではサッカーを楽しみ、奨励会に入ったのは一五歳の時だった。入会後わずか二年という最短記録で三段リーグに駆け上った。まだ一七歳なのだ。今回四段昇格を逃したとしても時間はまだたっぷりと残されている。自分とはまるで違う。

一方、翌日宮内と対戦する岩城啓一は一三歳で奨励会に入った。以後四年半をかけて三段まで昇段したが、それからがよくなかった。八期四年が過ぎても四段へ昇段できなかった。九期目の今期もすでに昇段の可能性はなかった。だから明日宮内に勝っても負けても大した影響はない。その岩城が、突然、村尾から自宅マンスリーマンションに呼び出された。驚いたのは岩城だった。こんなことは当然初めてだった。

村尾は岩城に「どうしても宮内に勝ってほしい。そうでないと困る、そうでないと自分は終わる」と言った。それ

から村尾は秘策を書いた紙切れを岩城に渡した。「このと  
おりに打てば何とかなる」と言うのだ。そこには宮内との  
対局の予想手順が書かれていた。これまでに宮内が棋譜に  
残した多くの対局を徹底的に研究したのだと言う。宮内は  
必ずついて打ってくる。そうしたらこう打つ。そうすれば宮  
内はこう返すだろう。綿密な流れが書かれている。行き着  
くところは結局岩城の勝利となっていた。岩城は思った。  
冗談じゃない。どうして村尾の言うとおりに打たねばなら  
ない？ 内心悔しいものを感じたが、とりあえず勝てる  
と言うのなら何でもいいと納得し、その紙をもらって帰宅し  
た。そしてすべての手順を細大漏らさず記憶した。

岩城はここまで四段にこだわる村尾の鬼気せまる顔に恐  
怖を感じた。何がなんでも勝ちたい。他人の力を利用して  
でも勝ちたい。彼の人生はまさしく将棋と共にあったとい  
う証拠だった。将棋から離れたら村尾には何も残らない。  
だから当然だった。自分はそこまで徹底できるか？ 自分  
は将棋を甘く見ていたのかもしれない。三段を四年経験し  
てもまだ四段になれない。下手をすると村尾のようになっ  
てしまうかもしれない。寒気が岩城を襲った。

翌日、岩城は恐る恐る村尾の考えたとおりの手順で駒を  
進めた。驚くべきことに宮内は村尾の考えたとおりに駒を  
打ってきた。つまり宮内は村尾の手のひらの上にあつたとい  
うことだ。それだけ村尾は凄いいということだった。こん  
なことって現実にあるのだろうか。そして最後は本当に天  
才・宮内に勝つたのだ。これで村尾はついに一歩四段に近  
づいた。

岩城が宮内に勝利を収めた、その日の午後村尾は対局を  
予定していた。が、開始時間になっても村尾は会場に現れ  
なかった。こんなことは初めてだった。このままでは不戦  
敗になる。あり得なかった。不戦敗になればこれまでのす  
べての努力が水泡に帰してしまう。きっと何かが起きたの  
だ。奨励会は温情から住所録をもとに村尾の家を訪ねた。  
しかし大家は、「最近引越しましたよ。家賃滞納でね、  
転居先は聞いていません」と言った。奨励会は村尾のため  
にもどうしても三段リーグでの対局をさせたかった。彼の  
苦勞を十分すぎるほど知っていたからだ。

奨励会事務局はその後も懸命に村尾の転居先を探した。  
村尾の負けは確定していたが、その行方を捜した。そして

一週間を要してたどり着いたのが例のマンションだった。

管理人の了解を得て部屋に入った事務局の人は驚いた。村尾が床に倒れており、すでに絶命していたのだ。司法解剖が行われた。すると脳挫傷が起きており脳内に血液が溢れていたことが致命傷と分かった。もっと早くに発見されていれば命は助かったかもしれない。脳挫傷は室内で転倒した後頭部を激しく打ち据えたことが原因だった。酒の一升瓶が近くに落ちており、血糊があった。あつけない死だった。

村尾の人生とは一体何だったのか、それはわからない。それでも大好きな将棋に打ち込めたから幸せだったのではないか。村尾とともに暫定二位だった山縣が、天才・宮内と共に四段に昇格した。

人生は実に様々である。が、集中し燃焼し尽くした村尾のような人生も案外悪くはないな、というのが筆者の正直な感想だった。

\*筆者の判断で一部ストーリーを変更しました。興味のある方は原文をお読みください。

### 倉田百三氏「出家とその弟子」について

これから書く場面は倉田百三氏の大正五年の著作「出家とその弟子」の一節である。したがってこれが事実であつたかどうか、甚だ疑問である。何故ならこんな小さな出来事が歴史に残るはずがないからである。多分、倉田氏が親鸞上人の全人格を咀嚼したうえで、上人ならばこうした場面ではかく行動したであろうとの想像の下に書いたと思われる。私の親鸞上人に関する知識は間違いなく乏しい。しかし倉田氏の描写は有り得た事実と確信する。

ある冬の雪が降る寒い深夜のことだった。親鸞上人とその弟子、慈円と良寛の三人は托鉢行脚の途中、峠の山道で道に迷い難儀をしていた。寒さに震えながらいまにもその命の灯が消えようとしていたのである。すると神仏の恩寵なのか、前方に小屋よりは多少大きいが見えぬ家が集落を離れてポツンと一軒建っているのが見えた。三人は歓喜し、良寛が家の戸口を叩き一晩の休息を願い出た。出

て来たのは、佐兵衛という元武士の妻でお兼という女だった。佐兵衛は獣の狩人として生計を立てている。お兼は心優しい善良な人で、佐兵衛に逆らえないようだった。彼女は佐兵衛の心がいまやねじ曲がってしまい他人に冷酷に振る舞うところが心配だった。お兼なら是非もなく家の中に三人を引き入れたであろうが、佐兵衛は拒否した。お兼と一緒にになったところの佐兵衛は善良温厚な人であったが、世間の荒波に晒され、何回も他人と諍いを繰り返して、また騙されたりするうちに他人が信じられなくなっていた。いまでも彼は土地の人々との関係が上手くいっていなかった。お兼はそんな佐兵衛を見て、このままでは人間がだめになってしまうのではないかと心を痛めていた。

「だめだ、だめだ。人を泊めることのできる余裕などない」

佐兵衛は良寛に冷たく言い放った。この言葉が良寛の心に刺さった。

「この寒空ではわれわれ三人はいまにも凍死してしまう。あんたには人としての情けも優しさもないのか」

良寛は一步前に出て抗議しようとした。が、親鸞上人は

これを制した。

「良寛殿、仕方のないことなのです。人はみな己の信ずるところに従って生きています。われわれはこの方の言われることに従うしかないのですよ」

「ですが、お師匠さま。われわれは外にいたら凍死するしかありません」

良寛は我慢できなくなっていた。

「あんたは鬼か、われわれを殺す気か」

そう言う佐兵衛につかみかろうとした。親鸞上人は良寛の袖をつかみ、さらに制した。ところが、佐兵衛は良寛ではなく、あろうことか親鸞上人を突き飛ばしたのだ。

上人は尻もちをついた。良寛は激高した。しかし上人は静かに立ち上がり戸を開けて外に出て行った。良寛も慈円も黙って後にくしかなかった。夫婦の一〇歳くらいの息子は泣きじゃくっていた。これがのちの唯円であり、親鸞上人に弟子入りする人物となる。その唯円が後に親鸞の言葉としてまとめた書物が、あの「歎異抄」である。

三人が出て行き、残された夫婦は息子を真ん中に挟み床に入った。しばらくして寝静まったが、佐兵衛はどうも落



ち着かない。心が騒いでどうにもならないのである。どうしてなのか考えた。すぐに心がたどり着いたのは、自分が人として間違ったのではないかという心のわだかまりだった。起き上がった佐兵衛はお兼に命じた。

「二人して、あの三人を捜そう。そして家に入ってもらうんだ」

幸い三人はさほど遠くないところにいて、雪降る土の上で横になっていた。その体に雪が少し積もっている。見つけたのはお兼だった。

「お坊様、申し訳ございませんでした。どうぞ、戻っていただいて宅の中にお入りいただきとうございます」。

親鸞上人は心からありがたいと思った。神仏のお導きと感謝した。

「ありがとうございます。それでは有難く申し出をお受けいたします」

佐兵衛は僧というものを馬鹿にしていた。しかしいま、その存在を見直した。親鸞上人たちの人間性を羨ましいとも思った。それは修行の賜物に違いない。そうとわかれれば息子を彼らに託してみたい。家を出ていく前に彼らが修行

する京の寺院を聞き出した。いずれそこに息子を向かわせ、出来れば自分も同じ道に入りたいとさえ思った。

三人には感謝しかなかった。実はもう少し遅ければ体が冷えきって、三人は危険な状態だったのだ。三人は家に入り、佐兵衛の薪をくべる暖炉のそばで人心地をついた。

佐兵衛は言った。

「俺は坊主なんてものを一切信じていなかった。言いたいことばかりを言うだけで自分から働こうとしない。いい加減な連中と思っていた。だけどあんたは違う。俺はあとで自分が情けを知らない人間と悟った。でもあんたは一切俺を責めようとしなかった。俺は感動したんだ」

親鸞上人はこれに応えた。

「いやいや、ご自分を責める必要はまったくありません。これも運命なのだと私はそのとき思ったのです。これが神仏の私らに与えた試練であるし、私らはそれに従うしかないのです。だから誰も恨むことではないのです」

三人は翌早朝、温かい粥をいただいた後、雪の降り止んだ中、家を出て行った。佐兵衛の心は晴れ、満ち足りた思

이었다。人は誰しも良心というものを持っている。親鸞上人は図らずも佐兵衛の心を動かしたのだった。

私は決して人を責めない親鸞上人の生き方を佐兵衛と同様に羨ましいと思った。ふつうは出来ることではない。

この小説は全編で三章に分かれており、唯円が京の地で恋に苦しむ様子や上人の思うところと異なる心境に陥った上人の息子・善鸞との確執をそれぞれ他の二章で描いている。

台湾の元総統・李登輝氏は生涯にわたる心に残った三つの小説のひとつとして「出家とその弟子」を挙げている。因みに残りの二編はゲーテの「ファウスト」とダンテの「神曲」とのことだった。

(了)

### 「印旛文学の会」について

- ・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に二回発行する等の文芸活動を行う。
- ・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトに全文を発表する。
- ・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し発表する者とする。
- ・会員は、年会費千円を負担すること。年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。
- ・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。
- ・作品の長さについては特に規定しないが、一回に掲載できる枚数は、原稿用紙で一〇〇枚以内とする。
- ・その他、会の運営に関する重要事項の変更については、合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。